

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22330208

研究課題名(和文) 移行支援実践におけるコミュニティ・エンパワメントモデルの開発ー若者支援を中心に

研究課題名(英文) Developing community empowerment model for supporting practice of transition

研究代表者

宮崎 隆志 (Miyazaki, Takashi)

北海道大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：10190761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円、(間接経費) 4,260,000円

研究成果の概要(和文)： 種々の自立支援実践において重要な役割を果たす「媒介コミュニティ」(=包摂的コミュニティ)の機能を向上させる実践をコミュニティ・エンパワメントとして概念化し、それを基軸にした実践モデルを明らかにした。

居場所や中間就労の場などのコミュニティが、その媒介性を高める過程では、多様な参加者が自由に振る舞う(リーダーシップの分散性)と同時に、共通の価値を見出していく(相同性)ことが重要であり、それは「非決定空間」の創出によって可能になることが確認できた。支援者は、このような空間の教育機能を意識化した運営を行う編集者あるいはブローカーとしての役割を担っていることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research was to clarify the nature of community that enables the self-independence of its members. What we have found are the followings:

1) A community that can emancipate participants is one with a loose coupling among participants and between participants and community. We can call this function Non-determined zone. 2) Essential moments of this function are dispersibility and homology. Dispersibility refers to distributed processes organizing learning, and homology those that provide for the possibilities of sympathizing and synchronizing among independent participating agents. The conditions of making homology relate to the following: reversing dominant values, creating a new culture and the compounded structure of communities of practice. 3) The role of support staff in this space is that of 'editor' rather than designer. Each participant can become a designer of their own life story under such an editor.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：コミュニティ・エンパワメント 非決定空間 分散性 相同性 エディター ブローカー 移行支援

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展とワンセクトになった社会的排除現象に対し、イギリスのコネクションズに見られるような福祉と再雇用を結びつける workfare 型の自立支援政策が社会的包摂戦略として各国で採用された。この戦略については、就労支援に向けたエンパワメント機能向上への肯定的評価がある一方で、労働市場の格差・分断構造の解消にはつながらず、包摂戦略でありながら、支援を受けても就労できない人々に対するスティグマの生成とその帰結としての分断社会化をもたらす可能性があり、さらに、分断社会化に対応して「ゼロ・トレランス」を標榜する刑罰国家化が進展し(ヴァカン) 貧困が個人(市民) 道徳の高低に関わる問題として理解されることさえ危惧されている。

このようなマクロレベルの転倒性を生み出す理由の一つが、workfare 型自立支援策が採用している個体主義的アプローチにある。それに対する代替的アプローチとして、「居場所」づくりの重要性が指摘されてきたが、居場所から地域生活・就労への壁を乗り越える論理を解明しなければ、居場所は社会的危機を回避する「安全弁」にとどまり、新たな隔離を生み出すにとどまる。

このような理論・政策状況は実践における心理臨床・キャリア教育・居場所/自助グループ形成・地域社会参画という諸アプローチの並存として現れ、支援者の専門性についてもこの4つに分散したままである。

2. 研究の目的

本研究はこのような理論・実践・政策状況を踏まえ、統一的な自立支援実践の論理をコミュニティ・エンパワメントモデルとして措定し、教育学の立場から解明することを目的とした。分析の課題は、以下の4つに限定した。

(1) コミュニティを媒介にした諸個人の発達の論理

(2) 発達のコミュニティを支える支援者の役割

(3) 地域的なケイパビリティの向上をもたらす社会連帯論の地域的学習過程

(4) workfare 型自立支援の限界に関する比較研究

3. 研究の方法

(1) 国内の事例分析では、本研究の課題に対応した対象事例の選定基準を、社会的排除を地域社会のありかたとの関連で理解し、解決しようとする実践 社会的企業として新たな地域基盤型事業を展開し、就労支援や生活支援を総合的に展開している実践、マルチステークホルダーの組織化を図っている開放的な組織体であることにした。その結果、対象は暮らしづくりネットワーク(箕面市)、一麦会・麦の郷(和歌山市)、地域生活支援ネットワークサロン(釧路市)の3つに絞り込まれた。

調査は、実践コミュニティの生成過程と外部コミュニティとの交渉、支援者の位置と意味の変動に焦点を置いたインタビュー形式で行い、外部コミュニティ側からの当該実践コミュニティに対する評価も確認した。インタビュー記録及び既存実践記録の分析から、実践のストーリー(コミュニティ・ストーリー)を抽出し、ストーリーの転換点における意味の交渉過程に着目した。

(2) 比較調査の対象は、北アイルランドの若者支援に関わる地域組織とし、支援者・若者へのインタビューにより、国内3事例との比較を行った。

4. 研究成果

(1) 実践コミュニティが包摂・媒介機能を発揮し得るのは、当該コミュニティが意思決定やリーダーシップの分散性を構成要素と

している場合であった。排他的なコミュニティを経験してきた参加者は、このような場に参加することにより戸惑いを見せつつも、独自に協働を組織し、実践コミュニティを再定義するようになっていた。

(2) このような方略が支援者によってとられるのは、排他的コミュニティにおける支配的価値(=ドミナント・ストーリーに埋め込まれた価値)に対する批判の故である。3つの事例では、いずれにおいても支援者として参加し実践コミュニティの構築にあたって来た人々(特に1990年代半ば以後の支援者)は、この点を参加の動機としていた。

(3) 意思決定の分散性は、組織の無秩序を生む可能性もあるが、3つの事例によれば、結果的に種々の取組が同調しつつ全体の発展がもたらされていた。本研究では、この同調作用を相同性と呼び、それは上述の支配的価値の批判的反転(=実践の原点) 当事者の生活世界に内在した困難の理解、実践をとりまく状況についての情報共有によって可能になっていた。

(4) 以上の分散性と相同性を有する実践は、その内部に非決定空間を不断に創発させている。非決定空間とは、意味の探究と再構成が可能になる空間であり、意味の交渉空間といってもよい。包摂的コミュニティは、このような意味での非決定空間を本質的な契機とすることによって成立する。

(5) 非決定空間には、外部コミュニティでの経験とそれを通して構築された意味を持ちこむことができる。諸個人が参加する実践コミュニティは複数あるので、このことは諸コミュニティの重なりを生み出すと言ってもよい。このような特質の故に、非決定空間において生み出される実践は、重なり合うコミュニティの各々に共有され得る意味を伴う。

(6) 以上のようなコミュニティの運動は、新たなコミュニティ・ストーリーの創造過程

であり、新たな文脈性の構築過程である。文脈性を付与するものを規範とすれば、新たな文脈は、規範レベルの転換とともに進展することになる。当事者の語りが変化するのは、このような変化の故であり、ここにコミュニティの発展と諸個人の発達の同時進行を見てよい。コミュニティ・エンパワメントの意味は、このように理解できる。

(7) このようなコミュニティ・エンパワメント過程における支援者の第一の役割は、ブローカー(E.Wenger)である。支援者は、諸実践コミュニティの間で共通の課題=対象を設定し、その意味をめぐる対話と協働を促進させる機能を担っていた。そこでは、支援者は各実践コミュニティの中で生成した価値の代弁者であると同時に、他のコミュニティの視点から社会的なニーズを当該実践コミュニティに通訳する機能をもつ。第二の役割は、編集者機能である。当事者が実践コミュニティの十全な参加者となると、支援者は逆に周辺化し、外部コミュニティとの境界線上に立つ。そこでの「作者」が当事者であるとすれば、支援者は信頼を基盤とすることによって当事者集団からは相対的に自由な位置に立ち、当事者の声を社会的に説得力のある声にするために、「読者」の視点を「作者」に提起しつつ、実践コミュニティにおける協働の成果を「編集」している。このようにみれば、支援者は対人援助というよりも、当事者の場づくり(重なり合うコミュニティ)を支える役割を担うと理解したほうがよい。

(8) ブローカーとしての支援者と、重なりあうコミュニティにおける意味創造を担う当事者によって、包摂的コミュニティの実践は、外部コミュニティにとって各コミュニティが抱えている困難を解決する新たな回路への見通しを与えた。例えば、麦の郷の大豆加工の実践は、大豆作付によって耕作を放棄した農家の土地管理を担うとともに当該農

家の就労(=指導者)の場を生み出し、障害に直面してた人々の就労を農作業や豆腐製造等によって拡大したばかりでなく、直売所の開設によって、「買い物難民」化した高齢者の支援をも行うことになった。包摂的コミュニティは、困難を抱えた当事者を隔離して支援するのではなく、諸コミュニティあるいはそれに属する人々の困難を撚り合わせることによって、従来にない地域的な解決方法を創出する鍵を握っていた。この点は他の2事例でも同様である。

地域社会は諸コミュニティから構成されているが、それぞれが抱える困難を解決した地平に到達するための相互支援が、こうして可能になる。個々のコミュニティの展開方向についての選択の自由度が高まるという意味で、コミュニティ・エンパワメントは、地域のケイパビリティ(A.センのいうケイパビリティを、コミュニティを単位として指定する)を向上させる実践と言うことも可能である。

(9)北アイルランドの若者支援においては、リテラシー・ニューメラシーに関わる(成人)基礎教育と職業資格の取得に関わる職業教育、社会参加の主体を形成する市民教育の統合が基本課題となっているが、この課題に応える実践は、実践コミュニティの重なりを必然化させていた。

しかし、国内の3事例に比した場合、市場から要請される職業教育の比重が高く、教育内容が標準化されるために、とすれば実践コミュニティも硬直化する。他方で、生成的なコミュニティを形成していた事例では、国内事例と同様に、非決定空間を生み出すことによってコミュニティの重なりが新たな価値を生み出す基盤になっていた。北アイルランドの限られた事例との比較ではあるが、日本の3事例に即して得られた論理が有する普遍性を認めることができた。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)

- ・宮崎隆志、『中間地帯』の再建による社会空間の変容、日本社会教育学会 60 周年記念出版部会『希望への社会教育』東洋館出版社、99-116、(2013) 査読無
- ・宮崎隆志、意味空間としての場の発展論理、『社会教育研究』第 31 号、1-9 (2013) 査読無
- ・宮崎隆志、能力の協働性：麦の郷の実践を手がかりに、『所報協同の発見』No248、7-13(2013.) 査読無
- ・宮崎隆志、コミュニティ・エンパワメントの論理、臨床教育学研究第 1 号、1-19 (2013) 査読無.
- ・宮崎隆志、地域自治の主体形成と住民の学習～箕面市北芝地区の実践を踏まえて～、第 24 回現代生涯学習研究セミナー報告書、5-23 (2012) 査読無
- ・宮崎隆志、協同労働と創造的学習、協同組合経営研究誌第 640 号、14-21 (2012) 査読無.
- ・宮崎隆志、経済学・哲学草稿における人間存在論、北海道大学大学院教育学研究院紀要 116 号、141-155 (2012) pp. 査読無
- ・宮崎隆志："高校中退者の中退後支援の課題-ライフコース形成空間に着目して-" Business Labor Trend 439. 3-8 (2011), 査読無
- ・宮崎隆志："「ボーダーレス」下における学校の限界線の拡張可能性" 教育学研究 78(2). 126-137 (2011), 査読有
- ・宮崎隆志："若者問題が提起する教育実践の課題" 教育 2010 年 6 月号. 81~89 (2010), 査読無
- ・宮崎隆志："転換期における公民館実践の可能性" 月刊社会教育 2010 年 9 月号. 5~13 (2010), 査読無

[学会発表](計 12 件)

- ・宮崎隆志、重なり合うコミュニティ、(2013.10.5) 日本協同組合学会、明治大学
- ・武田るい子・日置真世、コミュニティエンパワ

- メントの論理 支援者は非決定空間をいかに生み出すか、(2013.9.28)日本本社会教育学会、東京学芸大学
- ・ 宮崎隆志・大高研道、コミュニティ・エンパワメントにおける支援者の役割、(2013.9.28)日本本社会教育学会、東京学芸大学
 - ・ Takashi Miyazaki・Ruiko Takeda・Kendo Otaka, Logic of community empowerment by facilitating negotiation of meaning, The Fourth Asian Conference on Education, (2012.10.25) Osaka (RAMADA Hotel)
 - ・ 宮崎隆志・武田るい子・大高研道・日置真世, コミュニティ・エンパワメントの論理, 第59回日本社会教育学会, (2012.10.6) 北海道教育大学釧路校
 - ・ 武田るい子: "NPOの設立理念はどう伝わったか" 第14回NPO学会, (2012.03.17). 広島市立大学(広島市)
 - ・ 宮崎隆志: "地域自治の主体形成と住民の学習-箕面市北芝地区の事例から-" 現代生涯学習セミナー, (2012.03.10). 昼神温泉観光センター(長野県阿智村)
 - ・ 宮崎隆志: "意味形成空間としての場の発展論理" 日本社会教育学会, (2011.09.17). 日本女子大学(川崎市)
 - ・ Takashi Miyazaki, Kendo Otaka: "Mediating communities in social inclusion interventions" ISCAR INTERNATIONAL CONFERENCE 2011, (2011.09.05). Sapienza Univ.(Rome)
 - ・ 杉山晋平・宮崎隆志: "発達の最近接領域の協働的創造の論理" 日本社会教育学会第57回大会, (2010.09.19). 兵庫県神戸市、神戸大学
 - ・ 宮崎隆志・日置真世・横井敏郎, 杉山晋平、市原純: "移行支援コミュニティとしての学校像の探求-コミュニティ・エンパワメントの視点から-" 日本教育学会第69回大会, (2010.08.22). 広島県東広島市、広島大学
 - ・ 宮崎隆志: "学童保育の現代的意義" 日本学童保育学会創立大会, (2010.06.22). 静岡県静岡市、

静岡大学 招待講演
〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等
<http://shakyo.edu.hokudai.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 隆志(Mitazaki Takashi)(北海道大学・大学院教育学研究院・教授)
研究者番号: 10190761

(2) 研究分担者

石黒 広昭(Ishiguro Hiroaki)(立教大学・文学部・教授)
研究者番号: 00232281

大高 研道(Ohtaka Kendo)(聖学院大学・政治経済学部・教授)

研究者番号: 00364323

武田 るい子(Takeda Ruiko)(清泉女学院短期大学・准教授)

研究者番号: 20442171

向谷地 生良(Mukaiyachi Ikuyoshi)(北海道医療大学・教授)

研究者番号: 00364266

藤井 敦史(HUjii Atsushi)(立教大学・コミュニティ政策科学部・教授)

研究者番号: 60262190

藤野 友紀(Fuzino Yuki)(札幌学院大学・人文学部・准教授)

研究者番号: 60322781

横井 敏郎(Yokoi Toshirio)(北海道大学大学院教育学研究院・教授)*

2010・2011*2012年度

研究者番号: 40250401

日置 真世(Hioki Masayo)(北海道大学・大学院教育学研究院・助手)*2010年度

研究者番号: 80528307

(3) 連携研究者

仲 真紀子(Naka Makiko)(北海道大学・大学院文学研究科教授)

研究者番号: 00172255